

災害時

「情報共有」

再考

国立研究開発法人 防災科学技術研究所
総合防災情報センター長

白田裕一郎



Yuichiro Usuda

いつでも課題とされる「情報共有」

「情報共有がうまくいかなかった」。災害が起きるたびに、情報共有は課題としてあげられる。情報通信技術（ICT）が進む令和に入っても依然、数多くの災害の検証結果の中に「情報共有が課題」という文字が躍る。いつになったら、情報共有の課題は解消されるのか。改めて、「情報共有」とは何なのか、再考してみたい。

情報とは

はじめに、共有すべき「情報」とは何かから紐解きたい。「情報」という定義は非常に曖昧である。実際の災害対応の現場で用いられる「情報」は、文字、数値、グラフ、地図、映像、声等々、実に千差万別である。

図1に示すDIKWピラミッドという考え方で整理したい。ここでいうデータとは何も手をつけてい

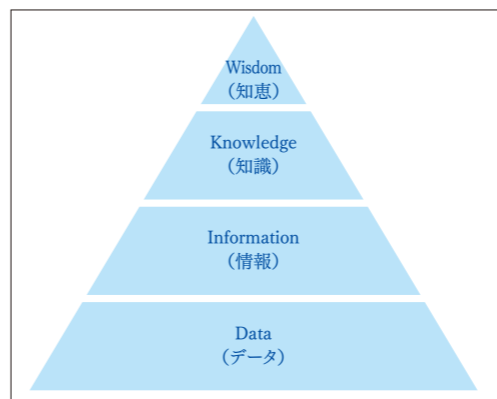


図1: DIKWピラミッド

共有とは

次に、「共有」とは何か。これも、

災害対応の現場で用いられる「共有」で考えると、様々なレベルがある。よく見られるものは、会議の場において、組織やチームの代表が、それぞれの活動や知り得た状況を報告することで、「共有」と呼ぶ場合は、なかろうか。ここで飛び交う報告は、DIKWに照らし合わせれば、その多くは「情報」に当てはまるが、「知識」や、ときに「データ」のままの場合もある。しかし、いずれにせ

よ、それが「共有」という読んで字のごとく、「共に有する」状態になっているかという、甚だ疑問である。「共に有する」という状態はどういう状態か。どういう状態になると「共有」が意味をなすのか。改めてDIKWピラミッドで考えると、「情報」というものは、それを受けて「知識」となり（あるいは「知識」そのものを受け）、そこから自らの「知恵」にすることが重要である。すなわち、受けたものを「どう使うか」というところに至ることが重要ではないだろうか。

情報↓知識↓知恵の事例

ここで一つの事例を示したい。図2は、二〇一八年六月十八日に発生した大阪府北部の地震において、作成された地図で、民間企業が示した都市ガスの復旧状況図と、行政が

示した避難所分布図を重ね、そこに自衛隊による給水・入浴支援地点を描いたものである。ここで、ガスの復旧状況や避難所分布はまさに「情報」である。ここから「ガスが復旧しておらず、避難者が多い場所が、お風呂に入れずに困っている人が多い場所」と捉えるのが「知識」であり、この知識から「この場所での入浴支援をしよう」となったものが「知恵」である。更に、この地図そのものを「情報」として捉えれば、「自衛隊がこの場所で給水・入浴支援をするなら、こちら側はまだ足りないはずだ」という「知識」が生まれ、別の組織が「我々はこのエリアで給水支援をしよう」という行動が生まれれば、それもまた「知恵」である。

情報に共有するための

このような情報↓知識↓知恵の連鎖は、それぞれの情報を「共に有」したからこそ生まれたものである。「共に有する」ことで、自らに他者の情報や知識を加えることができ、それが自らの新たな知識・知恵を生む。前述の事例であれば、情報の重ね合わせが新たな「知恵」を生んでいる。このような「情報」が処理できる状態での「共有」ができていないからこそ、情報↓知識↓知恵の連鎖が生まれない、すなわち、「情報共有が課題」なのではなかろうか。

もともと、災害現場はシビアである。他者の情報や知識を待つて自らの知恵、意思決定や行動を起こすような時間的余裕がない世界である。しかし、だからこそ、情報がそのシビアな流れに乗るほどに、即時的に、自動的に、「当たり前」に共有される状況を作らなければならないのではなかろうか。そのためには、それができていないという状況を情報として共有し、それを改善するノウハウである知識を共有し、個々が知恵を持つて対処する、それが社会の知恵となることが喫緊の課題ではないかと考える。

有」したからこそ生まれたもので